

思いつくまま

安部 弥太郎

「くろしお」編集委員の公文さん、前田さん、川村愿さん達が早々と原稿を書いて電子版に載せておられるので、私も何か書かなくてはと考えあぐねているところです。

いくら考えてみてもぜひ書きたい、皆さんに読んでもらいたいとか、お知らせしたい：なんていうものがなく編集委員だから仕方なく書く……というような感じで、これでは読む方も斜め読みでせいぜいあの人なんか書いてはったなあ的なことになってしまふなあ。といって、今更書きませんではさんざん寄稿を呼びかけ寄付までお願いしておきながら協力してもらった同期諸君に顔向けできないことになるなあと思ひ悩んでいるところです。

大阪で生まれてからずっと大阪、京都で暮らしていました。高知に來たのは転勤族の父親に連れられて土佐中学一年の二学期に編入した時で、それ以来土佐高

を卒業するまでの六年間を高知で過ごしました。

大方の同期諸君と違うところは高校卒業後は再び父親の転勤で関西に戻った、高知に根をおろしていない根無し草のような存在だということで、その辺が少し引け目を感じるというか、高知に疎遠になるところですが、多感な時代を土佐中高で送れた事は大変幸せだったと思っています。

高知に来る前は疎開先の大阪河内の田舎で西瓜泥棒や盗み食い、果ては悪ふざけで女友達を押し倒すなど悪童の限りを尽くし、土佐中編入当時も粋がって油を塗った帽子を被って登校し、生意気な奴だとみんなの鬻鬻を買いました。

それが文武両面で良い友達に囲まれていたうちに徐々に人が変わったようにまともになった？気がします。

碌に勉強もしないで秀才が集まっている土佐中へやって来たので父から「みんなに負けないよう自信を持って励め」とハッパをかけられ頑張って勉強しました。苦手な数学は公文公先生宅にお邪魔をして特訓を受けたりもしました。

所詮はガリ勉の点取り虫でしたが、成績は人並みに良くなりました。

チビのくせにバスケットボールにも精を出しましたが、何が楽しかったかと言えば今は亡き島崎博之君の映画館セントラルでよく映画を見た事、西山五朗さん

宅の広い庭で横山隆夫君、大西正一郎君らと洋弓に興じた事、固有名詞は出てきませんが、前田典彦さんに連れられて久松憲二さん達と一緒に谷川の溪流で水中眼鏡を覗きながらモリで川えびを獲ったり、テントを張って飯盒炊飯をしたりした事など：今も懐かしい思い出として残っています。土佐での生活は私にとって大きな節目であり、良き師と友に恵まれた六年間は大きな財産になったと感謝しております。

同窓会 名前出ないが盛り上がる

前後の脈絡は全然ありませんが、地域のシニアクラブを通じて年寄り仲間と交流を始めてからもう十年以上になります。

最近逝く人が目立ってきてきて会員数は九十世帯百二十九名に減りましたが、それでも町田市では有数の大きな老人クラブです。上は大正生まれから下は還暦前後まで、いつまでも元気に人生をエンジョイしたいと活発に活動しています。

今年五月～六月の手帳を見るとこんな具合です。

(五月二日)新緑を求めて近郊の旧白州邸までハイキング。十五名。一万二千歩。

(五月六日)週一の麻雀。二卓八名。

(五月八日)週一のグラウンド・ゴルフ。十二名。

(五月九日)月二回のハイキング。玉川上水沿いを歩く。一万六千歩。二十六名。

(五月十日)年二回の映画鑑賞会。「リンカーン」を鑑賞。十九名。

(五月十四日)ハイキング十五周年記念に十月の高尾山集中登山を決める。

(五月十五日)月一の食事会。百九回続けようと、つけた名前が「百九会」。

この日は横浜でステーキ料理。十三名。

(五月二十一日)シニアクラブ会報を印刷、配布。編集責任者として年六回発行。

(五月二十三日)月一のカラオケ。二十九名。

(五月二十五日)第十回甲州街道ハイキング。二十八名。

この日で九十六キロを完歩。

(六月六日)富士山満喫の日帰りバス旅行。三十四名。

(六月九日)シニアクラブ会員の集い。四十一名参加。

飲み食いしながらビンゴゲーム、カラオケに興じる。

シニア・シルバー世代の仲間は戦争を挟んで生まれ、経済の復興期やオイルショック等の時代に家庭の内外で苦勞し同じ時代を同じ価値観で同じような哀歎をもって生き「あれよ！あの人よ、分かるでしょう！？」と他の時代の人には通じない、固有名詞を使わないで通じる同じ時代の仲間、そのあとシニアクラブでも

同じ人生を味わっている仲間になった。

地域に集まったそんな仲間はこちらも同窓生、クラブは同窓会と言えるでしょう。結構楽しいです。同窓会だから強いて発展は目指さなくても良いだろう、同窓生が三人になるまで続けようという意思があればよい！そんなつもりでこれからも楽しく付き合つて残りの人生をエンジョイしたいと思っています。

一つの事を書くとき大体このくらいで終わってしまいこれではまだ足らんかなあ次は何にすることになってしまいます。

我々の年代になると体のことは先行きわかりませんが、最近「医者に殺されない47の心得」という本がよく読まれているというので買って読んでみたら面白い。要するに「医者を簡単に信じてはいけない。医療や薬を遠ざけ元気に長生きする方法を考えよう」というのです。

一九九五年（平成七年）に大腸ガンの摘出手術を受けてから十八年、再発することなく元気に過ごしていられるのは名医と近代医学の進歩のお陰です。

またご多分に漏れず随分前から降圧剤や脂質、尿酸値を下げる薬などの厄介になっていきます。要は病院、薬の世話になるかどうかは安心とリスクの兼ね合いなんでしょう。

今年五月孫娘に女の子が生まれ「ひい爺さん」になりました。複雑な心境ですが、曾孫の成人姿を見るためにも百歳まで頑張ろうと言ってみんなに笑われています。そのためにも今は調べようと思えば書籍でもインターネットでも情報が手に入る時代です。「病気のことには医者にお任せ」ではなく「医者を疑い自分で調べて考える」癖を身につけて命を縮めるようなことは避ける必要があるのかも知れません。

ほんまにしょうむないこと書いてるなあー…自分でも気が引けますのでこの辺で勘弁させてもらいます。

